

トークセッション——分断を超えるために

『災害ユートピア』が問うもの

熊本早苗(岩手県立大学)
k-sanae@iwate-pu.ac.jp

1. はじめに
2. 分断とは何か
3. ソルニットの捉える「利他性」とは
4. 薔薇とレジリエンス、日常のなかの非日常
5. おわりに

【主な引用文】

【引用1】

たいていの伝統的な社会では、個人同士や家族同士、集団の間に、深く根づいた献身やつながりがある。社会という概念自体が共感や親愛の情で結ばれたネットワークをベースとしていて、独立独歩の人はたいがいの場合、世捨て人または追放された者として存在した。(ソルニット『災害ユートピア』11)

【引用2】

こうなると、人々の日常生活は、社会的に大きな危険を抱え込むことになる。時に本物の災害がこの状況をいっそう悪化させる。しかし反対に災害がこういった状況を一時的に棚上げにし、わたしたち自身の中にある別の世界を垣間見せてくれる場合もある。平常時の社会的構図や分裂がことごとく崩壊すると、全員とは言わないが、大多数の人々が兄弟の番人になろうとする。すると、その目的意識や連帯感が、死やカオス、恐怖、喪失の中にあってさえ、一種の喜びをもたらすのだ。(ソルニット『災害ユートピア』11-12)

【引用3】

あなたは誰ですか？わたしは誰なのか？災害の歴史は、わたしたちの大多数が、生きる目的や意味だけではなく、人つながりを切実に求める社会的な動物であることを教えてくれる。それはまた、もしわたしたちがそのような社会的動物ならば、ほぼすべての場所で営まれている日常生活は一種の災難であり、それを妨害するものこそが、わたしたちに変わるチャンスを与えてくれることを示唆している。(ソルニット『災害ユートピア』456)

【引用4】

ナチスのアウシュビッツ強制収容所を生き延びた精神科医ヴィクトール・フランクルは、のちに、生きる意味と目的を持ち続けることこそが、多くのケースにおいて、そこにいた人たちの生死を分けたと結論づけている。(中略)フランクルは、ニーチェの「生きる目的をもつ者は、ほとんどどんな生き方にでも耐えられ

る」という言葉をも引用している。(ソルニット『災害ユートピア』457)

【引用 5】

1906年の地震で焼け落ちたある大邸宅では、石の門扉だけが立ったまま残った。写真を見ると、それはプライベートな内部の入口を縁取る代わりに、突如として、その廢墟がたたずむ丘のかなたの街全体を縁取っていた。災害も公的機関や社会構造を崩壊させ、個人の生活を一時停止させ、その向こうに横たわるより広い眺めを見えるに任せることがある。わたしたちがすべきことは、その入り口の向こうに見える可能性を認め、それらを日々の領域に引き込むよう努力することである。(ソルニット『災害ユートピア』468)

【引用 6】

As the novelist and speculator on utopias and dystopias Octavia Butler put it, “The very act of trying to look ahead to discern possibilities and offer warnings is in itself an act of hope.” Solnit, *Orwell’s Roses*, 259)

【引用 7】

He (Orwell) asked that roses be planted on his grave. When I checked, a few years ago, a crappy red rose was blooming there. Solnit, *Orwell’s Roses*, 264)

【引用 8】

Writing a book is a solitary business, or the part that is the actual writing is, and this one was written mostly during the exceptional isolation of the COVID-19 pandemic. But it emerges from conversations, kindness, and friendship from many people. Thanks go first of all, of course, to my dear friend Sam Green. Our ongoing conversations and his endless curiosity and enthusiasm for trees launched me on the initial quest that brought me face-to-face with Orwell’s roses. Solnit, *Orwell’s Roses*, 270)

Works Sited

- 伊藤詔子「序にかえて——核をめぐる言説の日米の協働について」『核と災害の表象』(英宝社、2015) pp. 5-22.
- 菅啓次郎「エレメンタル レベッカ・ソルニットの文章について」『群像』(第 77 卷 3 号)2022 年 3 月。pp. 16-28.
- 葉養正明「東日本大震災における宮古市の子どもたちの生活・学習環境意識の変化とレジリエンス」『災害文化研究』(第 6 号)2022 年 3 月。pp. 5-16.
- ハーン小路恭子「レベッカ・ソルニットのフェミニズムと繰り返しの美学」『群像』(第 77 卷 3 号)2022 年 3 月。pp. 41-52.
- 塚田幸光『クロスメディア・ヘミングウェイ——アメリカ文化の政治学』(小鳥遊書房、2020)。
- 松永京子『北米先住民作家と核文学——アポカリプスからサバイバンスへ』(英宝社、2019)。
- 山崎憲治「戦時体制確立期に尋常小学校で編纂された教育資料にみる防災と人権」『災害文化研究』(第 6 号)2022 年。pp. 27-38.
- Filipova, Lenka. *Ecocriticism and the Sense of Place*. New York: Routledge, 2022.
- Gormley, Michael J. *The end of the Anthropocene: Ecocriticism, the Universal Ecosystem, and the Anthropocene*. New York: The Rowman, 2021.
- Solnit, Rebecca. *A Paradise Built in Hell*. 高槻園子訳 『災害ユートピア』(亜紀書房、2020)